





商品陳列館階上(一)



商品陳列館階上(二)















19 小樽駅前通り



20 産業会館 1.



21 産業会館 2.



34 経済研究所 1.



35 経済研究所 2.



36 短大校舎 1.



37 短大校舎 2.



38 市立市民病院



39 小橋駅



40 小橋駅構内



52 1階廊下 1.



53 1階廊下 2.



54 2階廊下



60 入学試験風景



61 入試合格者発表 (昭和36年)



72 地獄坂 4.



73 地獄坂 5.



74 地獄坂 6.



1  
2  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
13  
14  
15  
16  
17  
18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50



前夜祭パレード





小樽商科大学  
創立五十周年記念講演会

講師及び演題

作家 高見順氏

時代・社会・人間

京都大学教授  
ノーベル賞受賞者

湯川秀樹氏

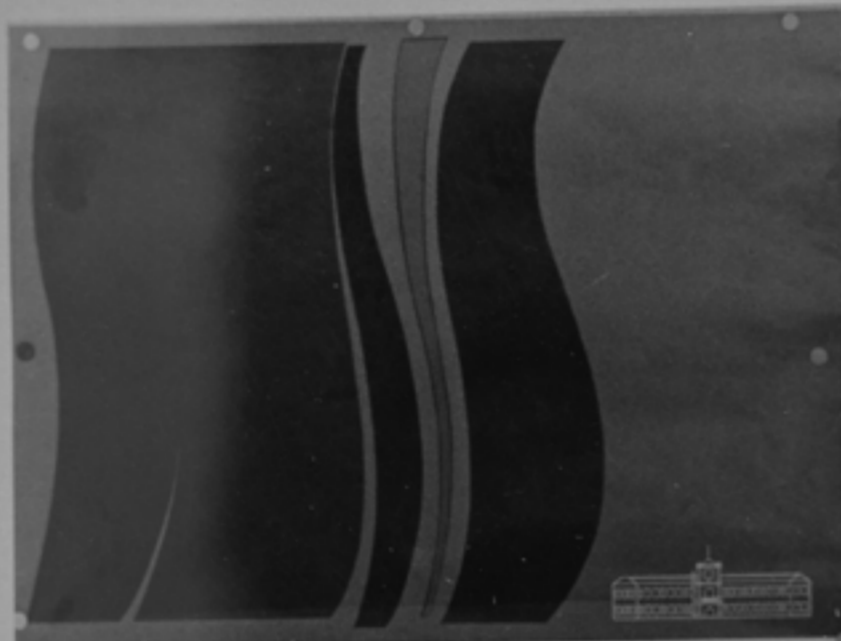
現代科学と人間

とき 7月9日(日)午後6時30分より  
ところ 稲穂小学校体育館

入場無料

主催●小樽商科大学●後援●小樽市●小樽市教育委員会





小樽商科大学創立50周年記念  
**NHK札幌放送管弦楽団演奏会**

- 1. 前奏曲 栄典歌謡曲
- 2. 交響曲 第40番・ト短調
- 3. 交響曲 第6番・ロ短調「未完成」
- 4. 組曲「坂田舞踏会」抜粋  
 円舞曲ワルツ

◎日時 / 7月9日(土) 午後6:30開演  
 ◎会場 / 小樽緑蔭高校体育館

入場整理券  
 7月1日(土)正午からNHK小樽放送局で配布開始  
 配布終了

主催 小樽商科大学・NHK小樽放送局

小樽商科大学創立50周年記念



入場整理券  
 (1枚1名)

**NHK 札幌放送管弦楽団演奏会**

1961/7月8日(土) / 午後6:00開場 6:30開演 / 小樽緑蔭高校体育館



主催 小樽商科大学・NHK小樽放送局

- 開演後は入場できないことがありますので早目にご入場下さい。
- 子供さんのご入場にはご遠慮下さい。
- 上座をご待参下さい。

### 商事模擬裁判

—乗っ取り事件—



とき 7月7日午後6時より  
ところ 本学講堂  
発表 商法ゼミナール

### 経済シンポジウム



# えんげき

## 英語劇



Spreading the News

(噂のひろまり)

原作 Lady Gregory



## フランス語劇

L'anglais tel qu'on le parle

(英語で話せばこんなもの)

原作 Tristan Bernard



スペイン語劇

Sancho Panzo, Gobernador  
(総督閣下サンチョ・パンサ)



中国語劇

阿Q正伝



日本語劇

挿(エピソード)話

産業調査会



謡曲部



詩吟部



グリークラブ



祝賀の温分け記念碑



久野ゼミナール



"克己" RYUDO  
 Head, Heart, Hand  
 久野 武治  
 大学4年内、そして今後も  
 重力に逆らって行こう!! 北山

吉武  
 福光武治  
 諸君集まらば  
 下野生光朗





正 気 寮

北 斗 寮

民の耳目をそばだしたこともあったが、これらの運動部を正式に組織するとともに、文化活動をおこし、校風の樹立につとめようとする声がおこったのである。明治四十四年十二月上旬、全校的なクラス会が小樽クラブにおいてひらかれ、さつまいをすすりせんべいをつまみながら一人一人が起つて、学生のあり方について意見を述べあい、つづいてその数日後、生徒總會をひらいて校友会規程案の審議をおこなった。こうして十二月二十日、会議室において校友会の発会式をおこない、渡辺校長を会長に推戴して正式に発足したのであるが、その最初の規則をみると学芸部、武道部、運動部の三つの部がもうけられており、開校第一年から活発な活動をはじめてきたようである。学芸部のなかでとくに目ざましい動きをみせたのは弁論部で、校友会発会式の日

午後から盛大な弁論大会をひらいた。部長の関会の挨拶につづいて、部員十一名が熱弁をふるったが、その模様を「高商評判記」はこう伝えている。「一高出身の講師松本理学士が「一高に同じきを見る」と激評した如く、潮気満々、之れが僅かに現下七十の生徒より収容せぬ数に於て先づ寂寥なるべき学校かとは想像がつかぬ、コオペレーションを高調し校友会の隆盛の為に光焰を吐ける藤田君あり、北海道に移住せる覚悟を以て其の経済界を離断し区々たる俸給生活に何ぞ節を留せんやと熱狂したる青山君あり、真意豊かな「バンドールの歌」に仮託して其の詩趣觸き弁に酔はした前田河君あり。……余興に移つての快興は学科に疲れた胸を医するに余りあり、前田河君のヴァイオリンは既に一家を成すの音楽



玉の舟 寮

文 行 寮